目を大事にして読書をしよう

先日、「視力一・〇以下、小学生三十七%、中学生六十一%、高校生七十一%。学校では二十分に一回六m先を二十秒間見ましょう」の毎日新聞記事を読んだ。そんなに多いのかと、私はびっくりした。私が高瀬高校三年の時は、クラス五十六人中、眼鏡使用者は男子のみ五人だった。その級友五人の顔を思い浮かべていたら、毎日新聞の仲畑流川柳秀逸にあった「人生の半分スマホ見て終る」が脳裏に浮かんできた。生活が便利になった分、目を酷使しているに違いない。

私は今八十五歳、耳はとても遠くなり不自由しているが、有難いことに目は良く見える。老眼鏡を使わずに、新聞や文庫本を読める。そんな私にも苦い貴重な経験がある。視力が急に落ちたことがあった。それに全く気付いていなかったのだ。大学受験願書提出のため、現三豊市高瀬中央保育所の場所にあった通称赤瓦と呼ばれていた公立病院へ友達数人一緒に健康診断に行った。それまでの学校での視力検査では、一番下の二・〇の小さい字がはっきりと見えていたのに、それが見えないのだ。判定は一・〇だった。

三月三日、四日の受験までは仕方がない。終われば文字を見るのは一切止めよう。一大決心をして実行した。東京教育大学（現筑波大学）へ運良く合格、入学して身体検査があった。視力は二・〇に回復していた。信じられなかったが本当だった。「やったあ！」

と叫びたいほどに嬉しかった。

三ヶ村組合立東中学校（現高瀬中学校）一年の二学期の初めだった。刎頸ふんげいの友・大井英臣君が、「眼鏡を掛けることにしたよ」と私に告げた。その時の無念そうな顔は忘れられない。それからは、野球部の練習や試合でも、彼は眼鏡を掛けてキャッチャーをしていた。後年、野村克也監督時代のヤクルトの眼鏡を掛けた名キャッチャー古田敦也をテレビで見るたびに、彼が大井君に重なって見えたものだ。

勤めに行かなくなって丁度二十年になる。朝ご飯の後は大体一時間余り、毎日新聞を赤線を入れながら念入りに読むのが習慣になっている。夜は赤線の部分をもう一度読み返し、その後四国新聞を三十分から一時間近く読んでいる。耳が遠くなってからテレビを余り見なくなったためでもある。スポーツや囲碁は、声が聞こえなくても楽しめるからテレビで見る。囲碁はテレビで見ても、頭の体操にとっても良いように思う。

四月に入ってから、「空海と密教、解剖図鑑」を読んだ。続いて文庫本を五冊読んだ。その六冊について簡単に記そう。

「空海と密教、解剖図鑑、著／武藤郁子、監修／宮坂宥洪、株式会社エクスナレッジ 二一五頁」

「密教とは」を学びたい思いで読み始めたのだが、仏教の専門用語が多くて繰り返し

て読まねばならず苦勞した。密教とは「自分の心の中に仏の心を見つけ出すこと」であると、臚おぼろ気ながらも少しだけ分かったような気持ちになった程度であった。四歳四ヶ月の時から祖父・品造の導きで、お大師さん（空海）を崇め敬って来た私は、もっと早く読むべきであったと後悔したのだった。

「稻森和夫魂の言葉一〇八、宝島社、二八二頁」（再読）

一六七頁に「もともと徳というのは中国から日本へ伝わった教えの一つです。古来、中国では『仁』『義』『礼』という二つの言葉で言い表されてきました。この『仁』『義』『礼』の三つを備えることで、初めてその人を『徳』のある人と呼ぶのです。」一六八頁に「この徳はさかのぼると、中国の春秋戦国時代に行きつきます。孔子をはじめとしたいわゆる諸子百家と呼ばれる聖人賢人たちが、『人間の道を説いた時代・・・』を読む。」

日本の江戸時代の武士道の「仁、儀、礼、智、忠、信、孝、悌」のうちの最初の三つが、中国では紀元前（日本は縄文時代）の孔子（前五五一？誕生）の時代に人の道として説かれていたのかと、中国と日本の歴史の違いを再認識したのだった。

「この国のかたちを見つめ直す、加藤陽子、毎日文庫、三四五頁」（再読）

七七頁「政治の姿勢を歴史に刻むため、『実』より『名』を取る 説明なしの任命拒

否、その事実と経緯を後世に残すために」この本文の前に編集部注が載っている。

編集部注…日本学術会議の会員候補として推薦されながら、菅義偉首相によって任命されなかった六人の研究者のうち五人が二〇二一年四月、学術会議の「連携会員」「特任連携会委員」として活動に参加することになった。最後の一人となった加藤陽子氏にも学術会議執行部が「特任連携会員」への就任の意向の有無を尋ねたが、任命拒否問題が解決していないまま、特任連携会員になるつもりはないと返答。「特任連携会員」になることをなぜ希望しなかったのか、毎日新聞の取材に対しコメントを寄せた。

皆さんは、加藤陽子氏が特任連携会員を唯一人拒否したのをご存じでしょうか。

「石川啄木、ドナルド・キーン、角地幸男訳、新潮文庫、五一六頁」

石川啄木の名前を知らない人は極めて少ないのではないだろうか。私も中学の国語の授業で学んだ記憶は残っているが、名前を知っている程度の知識しか残っていない。東京教育大学へ進学して東雲寮へ入り、六月から駒場寮へ移ったら、駒場寮には観音寺一高出身の田中豊君が居た。彼に出会って久し振りに完全な讃岐弁で話が出来た。その時、啄木の「ふるさとの訛りなつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」が、ひょいと頭に浮かんだ記憶が今も残っている。啄木は満三十六歳で死んだ。「夭折の天才」であった。八十五歳にして息が詰まりそうになる程に久し振りに読み応えのある重い内容で

あった。

「西行花伝、辻邦生著、新潮文庫、七七四頁」

こんな分厚い文庫本は初めてだった。何となく読み始めた。馬も蹴鞠も弓も、取り分け流鏑馬やぶらひが超一流の男が、陸奥への旅に出て後、歌のみに生きる道を選んだ人生を描いている。読み始めたら止まらない。毎日、一時間余り、何日かかっただろう。最後の七七三頁に、

願はくは花の下にて春死なん そのきさらぎの望月の頃

この歌に出合った。この歌、西行作だったのか。何故自分が諳んそらじているのか分からない。不思議なこともあるものだ。

「正岡子規、ドナルド・キーン、角地幸男訳、新潮文庫、四二〇頁」

子規に関しては、色々と読んだ記憶もあり、松山の子規記念館へは何度も訪ねているが、いずれも断片的知識に過ぎない。最近では、NHKテレビで「坂の上の雲」を見たばかりである。子規もそうだったのかと改めて敬服しつつ、嬉しく思った箇所を抜き書きしたい。

四九頁。「子規は自分が読んだヨーロッパの長編小説に感動したが、おそらくもっとも深く感動したのは、ヴィクトル・ユーゴーのLes Misérables (『ラ・ミゼラブル』)の

英訳だった。この作品に唯一言及している『病床日記』明治三十年（一八九七）十一月十六日の項で、英訳『レ・ミゼラブル』を読んだことに触れている。弟子の佐藤紅緑（さとうこうろく）一八七四―一九四九）は、子規の病床に集まる弟子たちと一緒に子規の『レ・ミゼラブル』の講義をたびたび聴いたという。」

子規も読んで感動したのかと私は嬉しくなった。私は、小学校五年の四月に「ああ無情」と記憶しているが、学校の図書室で借りて、分厚い本を生まれて初めて読んで、読書の虜とりこになったのだった。主人公、ジャンバル・ジャンの名前は頭に刻み込まれている。子規と私の大きな違いは、彼が英訳本で読んでいることである。

九九頁。「すでに見たように、小説作品を読むのが大好きだった。少年時代は滝沢馬琴（一七六七―一八四八）の小説、特に長篇の『八犬伝』（なんそうきとみ南総里見八犬伝）に夢中になった。」

私は七十年代後半になって楽しみながら二回読んだのだが、それは弟・英明が現代語に直した文章を推敲するためだった。それにしても、武士道を根底にした「勸善懲悪」「因果応報」、これほどの痛快な長篇小説が江戸時代に書かれていたとは、驚きであった。子規はそれを少年時代に、原文で読んでいるのだ。そこが凡人の私との大きな違いである。

読書とは、自分が読みたい本を自分で選んで、自分のペースで頭を働かせながら読み進める、人として最高に幸せな時間の過ごし方ではないか。八十五歳にしてつくづくそのように考える今日この頃である。

(令和七年六月一日)